

1990年代のバブル崩壊後、日本経済は長期低迷し「失われた20年」といわれます。しかし、おかげさまで大型低騒音風洞のこの20年間は、稼働率も非常に高く、鉄道分野はもちろん、それ以外の分野においてもさまざまな研究開発に活用され、まさに「(成果が)得られた20年」といってよいでしょう。鉄道では、この20年間に日本全国で、北陸、東北、九州、北海道などの新幹線が開業・延伸し、また、さらなる高速化が行われ、これらの研究に関連した風洞試験も多く実施されてきました。2016年7月には風洞稼働以来の大規模な更新工事が完了し、次の20年間に向けた準備は整いました。今後も大型低騒音風洞の特長

を活かした試験を行い、鉄道の発展に貢献できるよう取り組んでまいります。

今月号では、航空宇宙分野からみた風洞技術の現状と将来展望、大型低騒音風洞の20年間の実績と今後の活用、空力音、パンタグラフ、横風、空気抵抗の各試験への活用例を紹介しています。これらの試験では、大型かつ低騒音という風洞の特長が大いに活かされています。

さて、次号の特集は「鉄道総研30周年」です。鉄道総研のこれまでの30年間のあゆみ、そして、これからの研究開発活動について紹介します。どうぞご期待ください。(Y. S.)